

令和3年度第7回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会 議事録（要旨）

- 日 時： 令和3年11月30日（火） 午後2時30分から4時00分まで
- 場 所： 京北病院2階大会議室
- 出席者： 理事長 黒田 啓史
理 事 清水 恒広, 岡野 創造, 半場 江利子, 松本 重雄, 位高 光司, 白須 正
監 事 長谷川 佐喜男, 中島 俊則
事務局 折戸経営企画局次長, 長谷川管理担当部長, 菱田経営企画課長
京北病院 森理事・院長, 由良医療政策監・院長代行, 正木副院長, 大島事務管理者・
統括事務長

1 開会

2 議題・報告事項

(1) 和解案件について（議案）

資料1に基づき、長谷川管理担当部長から説明
議案のとおり承認された。

(2) 月次収支報告（9月まで）（報告事項）

資料2に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 京北病院の単月黒字は久しぶりのことでありうれしく思う。今後、運営費交付金等の補助金を加えると年間での黒字も視野に入ってくるのではないかと。また、一昨年と比較して給与費が減っているが、どのように分析しているか。
→ 給与費の一昨年比での減少については、老健施設での退職1名の影響が大きいと考えている。その後の欠員補充により、本年10月以降の実績では大きな差異は生じないと予想している。
- 京北病院は入院・外来とも診療報酬単価が上昇しているが、どのように分析しているか。
→ 市立病院も同様の傾向であり、受診控えにより診療報酬単価の低い、症状の軽い患者が減少していることが大きな要因である。
→ 一般的に入院日数が長引くと診療報酬も減少するため、適切な日数で退院を促しており、その効果も出ているものと考えている。
- 報道によると、昨年は多くの医療機関で減収となったが、コロナ関連の補助金を収入した結果、黒字となっているようだ。市立病院の今年度の収支予測として黒字転換もあり得るのか。
→ 昨年度は赤字となったが、今年度はコロナ対応の病床を増やすとともに必要な休床分の補償も見込まれることから、収支均衡を目指している。しかしながら、支援頼みの経営は根本的な解決にはならないため、経営改善に向けた検討を進めているところである。
- 市立病院の一般病床利用率は一昨年比で11.6%減と落ち込みが大きい。現在のコロナ禍の状況で80%台を達成することは可能なのか。

- 休床等のコロナ対応の体制を敷いていることから、分母となる総病床数が減っており、見かけ上の利用率は減っているが、実際の一般病床利用率は80%台後半で推移している。
- そうであればかなり高い数値となるが、入院の待機などは生じていないのか。
- 今は何とか運用できているが、本格的な冬場を迎え、徐々に厳しくなっていくと思う。現場はがんばっているが、かなり忙しい状態である。

(3) 京北病院取組状況報告（報告事項）

資料3に基づき、森理事・京北病院長から説明

- 京北病院の取組は一昨年もお聞きしたが、地域に密着した取組に頭が下がる思いである。人口減少は京北地域が抱える大きな課題であり、社会問題であるとともに行政が取り組む問題と言えるが、全国に参考にできる成功事例はあるか。
- 課題はそれぞれの地域で違い、取るべき対応も変わってくると思う。この問題については、京北病院単体でなく法人全体で考え、取り組んでいく必要がある。
- 令和2年度までの5年間では、年間140～150人の人口減少が見られたが、直近となる令和3年10月から過去1年間の統計では約70人の減少にとどまっている。これは初めてのことであり、芸術家の工房やいちご農園が新たにできるなど、以前よりも人口流入が増えた印象がある。また、トータルでは人口減少となっているが、65歳以上の減少率は3%程度にとどまっており、いずれも20%以上の減少となる他の年代よりも減少幅は小さくなっている。
- 地域として高齢者を支える仕組みづくりに一致団結して取り組んでいきたい。
- カーボンニュートラル（脱炭素）やスマートシティ構想など、新たな取組を通して人口増に結び付く事例もある。行政の課題かもしれないが、京北地域の魅力を生かし、ぜひ人口を呼び込んでほしい。
- 3年ほど前に、自動車メーカーによる自動運転実証実験のフィールド提供の話があった。結果は残念ながら候補から外れてしまったが、今後もこうした取組があれば地域全体で協力したい。
- 地域の在り方はまず行政が考えることではあるが、SDGsの考え方にもあるように、持続可能性を念頭に、地域資源をいかにうまく機能させ住民を支えていくことができるか、京北病院としても関与していきたい。

3 閉会